



高橋余一の「生活絵巻」



上の絵に書かれた文章

浪花節芝居

外題も「塩原太助」とか「野狐三次」など
人情物が多かった

テレビで

今流行の

浪曲ドラマとは違い

出演の役者自身も

浪花節をうなる

虫も殺さぬような

お姫様も太い声で

うなり出し 一寸ユーモラスだ

張ボテの馬

32 浪花節芝居

明治20年代の終わりごろから大正時代にかけて、地元の有志が中心となり「盛栄座」や「河内座」など、芝居小屋がいくつも建ちました。舞台部分はかやぶき屋根で、見物席は天幕や丸竹の屋根に、周囲をむしろで囲みました。座るところは、むしろやこもを敷きました。秋は旅行者による昼芝居が行われ、弁当持参で席取りをするほど連日大入りの盛況ぶりでした。木戸銭(芝居代)は、およそ大人が二銭、子どもが一銭でした。

「生活絵巻」には、浪花節芝居の一幕が描かれています。「塩原多助 愛馬の別れ」で登場する、造りものの馬と多助役の役者と思われれます。モデルとなった塩原太助は江戸時代の豪商で、19歳のとき炭屋に奉公、やがて独立し、一代で財を成した人です。浪花節では愛馬あおとの別れが中心に謡われています。

浪花節芝居は節劇とも呼ばれ、浪花節(浪曲)の節に乗せて、役者が演技をする大衆芝居でした。